



輪廻転生の思想



小林 道憲

輪廻転生の思想

ピュタゴラス学派にみる魂の輪廻

仏陀と同時代の古代ギリシアの哲学者、ピュタゴラスは、街を通りかかったとき、幼い犬が鞭打たれているのを見て、こう語ったと言われている。

「鞭打つのをやめたまえ、あの犬は実は私の友人の生まれ変わりなのだ。それはあの犬の泣き声でわかる」と。

ピュタゴラスという哲学者は、古代ギリシアの数ある哲学者達の中でも、とりわけ伝説にまつまれた人であって、その生涯についても詳しいことはよくわからないから、もちろん、この話も伝説の域を出ないものである。しかし、この作り話からも窺えるように、ピュタゴラスが魂の輪廻について説いたということは、おおかた本当のことのようである。彼は、当時、オルフェウス教という新しい宗教の大きな影響のもとに、南イタリアで、彼を中心とした一種の宗教団体をつくっていたのだが、その教団の考え方の基調は、この輪廻転生の思想によって彩られていた。

彼らの考えでは、私達の魂は、もとは魂のみの存在する純粋な世界にいたのだが、罪を犯したために、今は肉体に縛られた状態にあるという。そして、この犯した罪の償いのために、これから後も、魂は様々の生きものの肉体を遍歴していかねばならない。肉体は魂の墓であり、魂がこれに縛られている限りは、永遠に自由もなければ解脱もない。だから、私達は、魂が肉体の束縛から解放されて再び純粋な魂の世界に帰れるようにするために、魂を浄化しなければならない。ピュタゴラス教団の人々はそのように考えて、魂の浄化のために、種々の修業の道を実践したのである。

その浄化の道は、いろいろの欲望に打ち克つために、断食や無言の行など、一般に禁欲とか苦行といわれるものを行ったり、身体を精神の支配下におくために、体操を行ったり、和音の協和性を通して宇宙の調和的秩序を感得するために、音楽を聞いたり、さらに、感覚的なものを超越して純粋に精神的となるために、数学や哲学を研究したりする、というようなものであった。ピュタゴラス学派において、ピュタゴラスの定理をはじめ、いろいろの数学的・幾何学的発見がなされるのも、このような宗教的な背景があつてのこ

とである。それだけでなく、この学派の長い歴史の途上で行なわれる音楽や天文学や医学の研究は、学問の発達上大きな貢献をなすのであるが、これらがいずれも宗教的雰囲気から生まれてきたということは、見逃すことができない。古代や中世の世界にあつては、現代とは違つて、あらゆるものが宗教的なものと切り離し難く結びついて、有機的な体系となつていたのである。

ピュタゴラス学派の哲学は、よく言われるように、世界の原理を「数」と考える思想にその根本をおいているのだが、これは、今日の自然科学と同じく、この宇宙が数的な法則によつて支配されているという確信からくるものである。しかも、この宇宙の法則性は、魂が感覚的なものから浄められて、純化されることによつてのみ知られようと考えられている。とすれば、この思想もまた、魂の輪廻説と深く結びついていると言わねばならない。ピュタゴラスおよびその学徒の思想は、どれも、この魂の輪廻説から出てきていると言つてもよい。そして、この魂についての考えは、後のプラトンなどにも深く影響を及ぼすほど、古代世界では有力な霊魂観だったのである。

仏教の輪廻思想と地獄

ピュタゴラスと同時代の仏陀の教え、つまりへ仏教は、あらゆるものの相対性を説き、いかなるものにも実体性を認めない思想だから、魂というものの実体性も考えないはずである。従つて、その輪廻ということも説かないはずだが、しかし、実際には、当時民衆の間で信じられていたヒンズー教の輪廻思想を独自の形で受け容れている。私達の身体や言葉や意識の働きを業と呼び、悪業をなせば、その報いとして、衆生は三界六道への輪廻転生を免れないという。いわゆる「地獄」は、この六道のうちのひとつだが、おもしろいことに、仏教の発展とともにその数も増えていく。かくて、無間・八熱・八寒・孤独など、地獄にもいろいろあり、さらに、八熱または八寒地獄のひとつひとつには、それぞれ十六小地獄が付随し、また、孤独地獄は各自の業に応じて存在し、衆生はこれらの中で言うに言われぬ苦しみを受けるという。

要するに、とめどなく際限もない想像力が、かくもおびただしい数の地獄を作り出したのだが、なかでも、とりわけ、八熱あるいは八大地獄の描写は生々しい。そこには、内外自他の身が共に猛火を出して互に相燻する極熱地獄があり、また、火が身についてまわり炎に身が焼かれる炎熱地獄がある。さらに、激しい苦しみに迫められて悲しみの叫び声を発する大叫地獄や号叫地獄があり、また、多くの苦しみが集合して身に迫る衆合地獄が

ある。また、さらに、身体手足が黒縄で縛られた後切り刻まれる黒縄地獄や、衆苦が身に迫り悶えること死するがごとき等活地獄があるという。

かてて加えて、八大地獄のひとつひとつに付随しているという十六小地獄の叙述は、身のすくむような思いのするものである。そのひとつは熾熾増あつあつぞうといい、ここには熾熾が膝まであって、足を入れると皮と肉と血とが焼け爛れて墜ちるといふ。第二は、屍糞増あつあつぞうといい、ここには屍糞の泥が満たされ、中に針のように鋭い嘴をもった虫がいて、皮を切り、骨を破り、髓を舐むという。第三には、鋒刃増あつあつぞうといい、ここにはまた三種あり、ひとつは刀刃路あつあつぞうといって、刀の刃が仰むけに敷かれ大道をなしており、足を下すと皮と肉と血とは共に断え砕け墜ちるといふ。もうひとつは、劍葉林あつあつぞうといい、この林の木はみな鋭利な剣刃でできており、風が葉を吹き墜すと体が斬り刺され、骨肉が崩れ落ち、それを黒まだらの犬が噛みついて食うという。さらに、もうひとつは鉄刺林あつあつぞうといい、迫められて樹に登れば、長く鋭い鉄の刺が突きささり、鉄の嘴をもった鳥が眼玉や心臓や肝臓を啄んで争って食うという。第四は、烈河増あつあつぞうといい、ここには熱せられた鹹水あつあつぞう（アルカリ性の水）が満たされ、この中に浮き沈みしたり、蒸されたり煮られたりして骨肉みな糜爛あつあつぞうするといふ。そして、これら四つの小地獄が各地獄の四つの面にそれぞれあって、皆で十六になると言われている。（中村元『佛教語大辞典』）

いささか煩瑣ではあるが、何というおどろおどろしいイメージであろう。さらにまた、それに加えて、嚴寒が身に迫る八寒地獄があり、そのひとつひとつにまた十六小地獄が付随しているというのだから、それこそ生きた心地がしない。たとえ地獄を出ることができても、また、餓饉、畜生、修羅と輪廻転生していかねばならないのであってみれば、思っただけでも気が遠くなる。私達が幼いころから教えられてきた地獄のイメージ、火の海に投ぜられ、針のむしろに座らされ、空腹に耐えられず、牛馬に姿せられるというイメージは、その源泉をこの辺にもっているわけである。

しかし、仏教では、キリスト教とは違つて、この恐ろしい地獄から永遠に救われないと考えたわけではない。仏教は、このような迷いの世界を超えたところに、寂静な涅槃の世界があると想定する。そして、持戒や禪定によつて、生死輪廻する苦なる生存から解脱し、この寂静な理想世界に入ることができると考えたのである。

〈存在の負荷性〉の自覚

輪廻転生の思想はビュタゴラス教団や仏教に限るものではない。西洋でも、魂の輪廻と

いう考え方は、ピュタゴラス教団の思想的源泉をなすオルフェウス教にはもちろんのこと、ピュタゴラス以後の一部の詩人やプラトンなどにもみられる。また、キリスト教でも、正統キリスト教が否定するところを、一部の派は輪廻説を受け伝えている。さらに、それは、ルネサンス期の哲学やドイツ古典文学の流れの中にもみられる。東洋でも、ヒンズー教は輪廻転生の信仰を根本にしているし、この流れの中から出てきているウパニシャッドの哲学やジャイナ教の輪廻説は、仏教の体系的輪廻説の源泉にもなっている。

ところで、これら東西の様々な思想にみられる輪廻転生の思想は、私達の過去・現在・未来に關して、大体同じような考えをもっているようである。つまり、私達生きとし生けるものは、解脱せぬかぎり、過去・現在・未来とも、この迷いの世界を永劫に転生して苦しんでいかねばならないという考えである。

おそらく、この考えは、「この世の生が重荷である」という自覚から生まれてきたものである。私達の人生は、生きるということからして、すでに、重荷を負うて坂道を登ることがときものである。この世の生は、罪を犯しやすく、悪を為しやすく、過誤に満ちている。生はそのまま苦である。しかも、この存在の苦相の自覚は、単に人間の生にのみ限られず、生きとし生けるもの一般の生にも及ぼされる。生きとし生けるものが、車輪の回のように様々の生死を繰り返さねばならぬというイメージには、そのような運命的負荷性の自覚が投影されているのである。輪廻転生の思想は、「存在の負荷性」の自覚の表現なのである。

仏教の思想にあつては、ピュタゴラス学派の思想も同様だが、この「存在の負荷性」は、まず現在の生において自覚され、次に、それは、すぐ転生のイメージとなつて未来に表出される。つまり、現世における悪業が、来世における転生となつて報われると考えられる。

だが、この来世での転生という観念は、単に来世の問題にとどまるものではなく、むしろ、それは、現世において意味をもつ。なぜなら、ここから、この輪廻の世界を解脱して、永遠の世界を求めようとする意志が、現世において生まれてくるからである。未来は、いつも現在においてのみ意味をもつ。未来は、いつも現在に反射してくる。輪廻転生の思想が倫理的な意味をもつのも、このことによる。つまり、「この世で悪いことをすれば、来世で地獄に落ちるのだから、悪いことをしないでおこう、否、来世で救われるためには、この世で少しでも善行を積んでおこう」と考えるのである。未来での転生のイメージは、逆に、現在のうちに、「よりよき生」を求める心呼び起こす。輪廻転生の思想は、存在論的にも、倫理的にも、意義ある思想だったのである。

ピュタゴラス学派の思想でも、仏教の思想でも、現在の生における「存在の負荷性」の自覚は、さらにまた、未来から翻って、過去にも及ぼされる。つまり、仏教などでよく言われるように、現世における人間としての苦なる生は、すべて前世からの因縁によるものであると考えられるのである。生前の悪業の報いとして、死後様々な生を変転して苦しまねばならないというのであれば、この世に人間として生まれて苦しまねばならないのも、すべて前世での悪因によるものだと考えるのは、極く自然なことである。ピュタゴラス学派の思想でも、この現世での苦しみの原因は、前世における魂の墮罪という觀念に求められているわけである。

いずれにしても、ここでも、前世での悪因とか墮罪という觀念は、現世においてのみ意味をもつ。この考えによって、人は、現世における辛く苦しい生を「運命」として諦めることができるからである。現世における様々な営みは、前世の宿命の規定するところと考えることによって、もともと不満に満ちたこの世の生を断念し、かえって、罪の償いとか解脱とかいうような「よりよき生」に向かうことができる。現在が、過去から規定されることによって、より豊かなものとなるのである。輪廻転生の思想は、ここでも、よりよき生にとつて意義ある思想だと言わねばならない。

このようにして、現在における「存在の負荷性」の自覚は、未来に翼を広げ、過去に根を下して、「輪廻転生の思想」というある意味で壮大な世界観をつくりあげる。しかも、この思想の焦点は、現在における「解脱への志向」という一点にのみ絞られている。そのかぎり、存在の負荷性の自覚は、よりよき生を可能にする土台になっていると言えるであろう。人は、生の重荷を運命的なものとして自覚するから、かえって、そこからの解放を求めるのである。

ピュタゴラスの言う「純粹な魂の世界」や「涅槃の世界」は、そういう人間精神の超越を求める本性の表現である。存在の負荷性の自覚は、同時に、存在の超越性の希求につながっている。輪廻の世界と解脱の世界とが両極に相呼応して想定されるのは、人間存在のうちに、すでに、最初から、負荷性と超越性が相呼応して存在するということの表現なのである。輪廻転生の思想は、存在論的に深い意味をもっている。あらゆる妄想の生んだ迷信などではない。

現代人と生の謳歌

仏教の説話によれば、須弥山の遙か下の大海底には阿修羅が住み、その遙か頂上には帝

積天の宮殿があるという。精神の生きていた世界では、輪廻の世界と解脱の世界、迷いの世界と悟りの世界とが、明確な対照をなして現前していた。そして、人間はその両者の中間にあり、永遠の苦しみと永遠の救いとの間に立っていた。そこには、精神の秩序というものがあったのである。

かつてまだ輪廻転生の思想が信じられていたころ、地獄のイメージが、まるで、ありとあらゆる救われ難き罪業の坩堝のように、ますますおどろおどろしいものになっていったのも、逆に、人々の解脱への希求の念があまりにも強かったからであろう。また、反対に、人々の解脱への希求の念が切ないほどにもいやましに募っていったのは、逆に、あの恐しい地獄への恐怖の念があまりにも強かったからであろう。人々の心は、なにごとにつけ、明確な対照と確固とした秩序の中で動いていたのである。だが、そのことよってこそ、人々はよりよく生きることができた。死後の世界についての明確なイメージは、かえって豊かな生を約束したのである。

ところが、近代の自然科学的世界観が登場してきて以来、死は、生命の単なる機械的停止という意味しかもたなくなつた。死は、生命を構成していた諸元素の単なる物理的な離散にすぎなくなつてしまつたのである。かくて、あの輪廻転生の思想や魂の不死の思想は、他愛もない迷信として退けられるようになってしまつた。悪業を為せば、死んでから、犬になつたり牛になつたりすると言われても、科学的思考の流布している今日、もはや誰も信ずる者はいないであろう。

しかしながら、その代わり、近代科学の洗礼を受けた現代人は、輪廻転生の思想のもつていたあの豊かな存在論的構造を失つてしまつた。事実、輪廻転生の思想は、他ならぬへ存在の負荷性の自覚の表現だつたのだが、現代人は、輪廻転生の思想とともに、何よりもまず、この負荷性の自覚をなくしてしまつた。つまり、現代人にとっては、この世の生は、もはやどうにもならぬ重荷ではなくなつたのである。そのために、解脱によつて寂靜な悟りの世界に帰ろうという考えや、苦行をして肉体を離れた純粋な魂の世界に帰ろうという思想など、泥酔者の戯言のようにしか思われなくなつた。

現代人は、単なる生に価値をおく世俗的近代思想に支配されているために、生の負荷性も、従つて、それを乗り超えようとする生の超越性も喪失してしまつた。現代人は、すべての超越的世界を否定してしまつたために、至つて貧しくなつてしまつた己が心の空洞を、あたかも享樂的生というあり合わせのもので、手当たり次第に埋め合わせてしまおうとしているかのようである。

確かに、現代人の観念の中には、負荷性と超越性、つまり輪廻と解脱、地獄と極楽、迷いと悟りなどが、明確な対照をなして歴然と存在してはいない。すべてが、得体の知れぬいゝ生という混沌とした曖昧性の中に混合され、平均化され、水平化されてしまっている。人々の観念の中で、高貴なものと低俗なもの、善きものと悪しきもの、真なるものと偽なるものという階層的秩序が破壊されたのである。従って、人間はもはや相対立するものの中間的存在ではなく、逆に、傲慢にもあらゆるものの中心的存在になりあがってしまい、そのために、さまざまのものが人間的生を尺度にして量られることになった。かつて確固としてあったあの精神の秩序が、崩壊してしまつたのである。

死と運命の忘却

現代の世界では、生と死の明確な対照もまた存在しない。かつてまだ精神の生きていた世界では、死は、人々のまのあたりに差し迫っていた。『往生要集』などで説かれていたように、おどろおどろしい地獄は、目の前に現前していた。だからこそ、極楽往生への切ない願いもいやましに募つていったのである。死は、生との明確な対照をなすことによつて、生のうちで豊かな意味をもつていたのである。

ところが、現代においては、死は、もはや差し迫つたものではなく、せいぜい、それは、やがていつかは来るもの、従つて、今はまだ来ないものというふうに、まのびした時間感覚のうちでしか捉えられていない。しかも、その死さえ単なる生命の物理的停止にすぎないとすれば、現代人にとつて、死は、もはや生のうちで意味あるものではなくなつていく。

かくて、人々は死を忘れた。ヨーロッパ中世の諺に、*ヘメント・モリ*つまり「死を忘れるな」というよく知られた言葉があるが、これに反して、現代では、死を忘れて生を謳歌することの方が価値あることだと思われるようになった。人間が死を忘れたとき、生もまた貧しきものとなる。現代では、死が喪失されると同時に、本当の生もまた喪失される。

現代人は、来世という未来を喪失してしまつたのである。だから、また、よりよき現在も喪失してしまつた。来世という観念が生きていた時代には、それが地獄であれ、極楽であれ、人々をしてよりよき生に向かわせた。ところが、そういう観念がもはや信じられなくなつた今日では、未来においてではなく、何より現在において、よりよく生きることが忘れ去られ、人々は、もつぱら単なる生の充足に忙しく妄動することになつたのである。現代における倫理感覚の衰弱は、このようなところからも出てきているとも言えるであらう。

さらに、現代人は、来世という未来を失うばかりでなく、前世という過去をも失う。つまり「前世の因縁」という「運命」を失うのである。そのため、現代人は、この辛く苦しい現在の生を諦めることができない。かくて、現代人はいつも現在の生に不満である。そのため、人々は、与えられた分限を越えて、際限もなく自己の欲求を満たしていこうとする。そして、それが満たされぬときは、他を怨み、他と争う。現代人は、かつての人々がもっていた運命愛というものを失ったのである。前世という運命を失ったために、よりよき現在も失ったのである。

現代人は、過去を失い、未来を失い、現在を失って、ただひたすら、生の欲求を無限に追求していこうとして、しかも、永遠に不満である。魂はなお肉体の墓ツボに束縛ムスされているようである。